

仮かり初そめの花嫁

〜義理で娶めとられた妻は夫に溺愛されています!?!〜

## 目次

仮初めの花嫁

〜義理で娶られた妻は夫に溺愛されています!?!〜

5

番外編 バーガンディーカラーの思い出

269

仮初めの花嫁

〜義理で娶られた妻は夫に溺愛されています!?〜

## プロローグ

ドアを静かに開けて部屋に入ってきた夫が、ベッドの上に正座している私を見つけて足を止めた。そのギョツとした表情から、彼が困惑していることがありありと伝わってくる。それはそうだろう。

これは彼にとつて、親友の遺言に従っただけの愛のない結婚。

だけど私は……

私はベッドの上で三つ指をつけてゆっくりと頭を下げた。

「冬馬さん……どうか私を、本当のあなたの妻にしてください」

——どうか私を……抱いてください。

これはそんな風に始まった私達が、本当の夫婦になるまでの物語。

## 1 兄の遺言

兄、八神大志の葬儀が終わった直後の親族会議は酷い有様だった。

こちらは特に話すこともないのに、『今後の話し合いをしたい』とアパートまで押しかけてきた父方の叔父と叔母夫婦が、リビングのソファアを陣取っている。

「桜子だけじゃ、どうしようもないだろう？」

「大志くんがいらないんじや事務所も潰すしかない。処分はどうするんだ？」

「桜子ちゃんはまだ若いし、財産の管理は任せてもらえないか？」

身内に不幸があると、ずっと疎遠だった親戚がこぞとばかりに擦り寄ってくるというのはよく聞く話。けれど、実際目の当たりにすると、あからさますぎて吐き気がした。

私、八神桜子は、二十四歳の誕生日の翌日に、たった一人の身内である兄を亡くした。

両親を事故で亡くしてからは親代わりとなつて私の面倒を見てくれていた、八歳上の義理の兄。

私は彼のが大好きだった。

兄が生前に言っていた言葉を思い出す。

『俺達に頼れる親戚はいない。アイツらは父さん達の再婚にも文句をつけた挙句、さんざん借金を

頼んできたから、付き合いを絶つてるんだ。絶対に信用しちやいけないよ」

だから彼らに葬儀に参列してもらうつもりはなかったのに、兄の死の報告をしたら親族代表として出しゃばつてきた。

葬儀中、この人達が聞こえよがしにぶつけてきた心ない会話は忘れられない。

『あの母娘おやこが来てから不幸続き』

『血の繋がりもない子が全財産を丸儲け』

同時に、私の隣に立っていた男性、冬馬さんへの風当たりも強かった。

『アイツは一体何者なんだ』と言わんばかりの露骨な視線を向けていたのだ。

——冬馬さんは身内みたいなものなんだから！ あなた達よりよっぽどお兄ちゃんの死を悼いたんでくれている！

私は唇を噛みながら、こんな人達の言いなりになるものかと、必死で顔を上げて前を見た。

そして、現在。葬儀を終えアパートに戻ってきた私は、ガラス製ローテーブルの横に正座したまま、膝の上で両手の拳こぶしを震わせる。

すると、隣に座っていた冬馬さんが私の手を上から包み込んで優しく微笑ほほえんだ。

「桜子ちゃん、大丈夫だ」

「えっ?」

私と目が合うと、彼は任せてとでも言うように頷うなずいて立ち上がる。

「皆様、本日は八神大志くんの葬儀に参列いただきまして、誠にありがとうございました。私は大

志くんが代表を務めておりました『八神法律事務所』の共同経営者であり弁護士ひのの、日野冬馬と申します。これより大志くんの遺言をお伝えしたいと思います」

——遺言!?

驚く私を見下ろしてまたふわつと微笑ほほえむと、動揺する親戚を尻目に遺言書を読み上げていく。

#### 遺言書

私、八神大志は、次のように遺言する。

第一条 私、八神大志の全財産を、妹の八神桜子に譲ることとする。

第二条 八神桜子の後見人を日野冬馬とし、彼が桜子が相続した全財産を管理することとする。

第三条 八神法律事務所の経営権を、共同経営者である日野冬馬に譲ることとする。

第四条 この遺言状の執行については、全てを日野冬馬に委託し、親戚を含め、その他の者の一

切の口出しを禁ずる。

~~~~~  
ここまで読むと、冬馬さんは「この後に不動産登記や株式などについても細かく記しされていますが、これはあなた方には必要のない情報だと思います。質問がなければ、どうぞお引き取りください」と頭を下げた。

「なっ、なんだって!? その遺言書が本物だって証拠があるのか!」

「はい。大志くんの自筆証書遺言です。彼の署名と日付記載、押印がされています」

そう言うと、文面を叔父達に晒して確認を求める。

「異論があるようでしたら家庭裁判所にでも申し立ててください。こちらは一向に構いません」  
「なっ、なんなんだ、貴様はっ！ 大体お前に何の権利があつて口出ししてるんだ！」

「私は大志くんの親友であり、事務所の共同経営者であり……そして、桜子さんの婚約者でもあります」

——えっ、婚約者!?

「桜子さんのことは、私が彼女の夫として一生大切に支えていく所存です。あなた達こそ、私達家族の問題に口を挟まないでいただきたい！」

そう強い口調で告げられた叔父と叔母達の矛先は、私に向かう。

「桜子、婚約って本当なの!？」

「桜子、お前、騙されてるんじゃないのか？」

「こんな男に財産を管理させたら、いいように使われてしまうぞ！」

——なんなの、この人達は。お兄ちゃんの死を弔うどころか……

多重放送のように一斉に喚かれて、私の中の何かがプツリと切れた。

「……お引き取りください」

「はあ？ 桜子、お前……」

私はスツと立ち上がり、冬馬さんの隣に寄り添う。

「冬馬さんが言った通りです。彼は私の婚約者で、夫になる人です。今後のことは彼が全てやって

くれますので、心配はご無用です。どうぞ安心してお引き取りください」

私の言葉を引き継いで、冬馬さんが私の肩をグイッと抱き寄せる。

「その通りだ。さあ、今すぐ出ていってくれ！」

鋭い視線で彼に一蹴され、叔父達は苦虫を噛み潰したような顔で退散する。後には、私と冬馬さんだけが残された。

私はへなへなと床にへたり込むと、ガラステーブルに両腕をつく。その横に冬馬さんが座り、顔を覗き込んできた。

大きな手が、ゆっくりと背中を撫でてくれる。

「桜子ちゃん、大丈夫かい？ あんな大声でいろいろ言われて怖かっただろう」

「いえ、冬馬さんのお陰で助かりました。私ったら遺言書のこととか、何も知らなくて……」

「ああ、大志が自分の病名を知った直後にしたためたんだ。自分の死後、君が困ることのないよう、全ては桜子ちゃんのために……」

「そうだったんですか……。冬馬さんがいなければ、さっきもどうなっていたことか」

あの叔父達には、両親の葬儀の時も大騒ぎして場を乱した過去がある。

——確かあの時も、冬馬さんが助けてくれたんだ……

「ふふっ、それにしても……婚約者だなんて、上手い嘘をつきましたね。あの時の叔父達の顔つたら……」

「嘘じゃないよ」

「えっ？」

冬馬さんの言葉に笑みを引っ込めて見つめると、彼は真剣な表情でハッキリと告げた。

「婚約というのは嘘だけど、俺が君の夫として一生支えていくというのは本当だ。これも大志の遺言、アイツが最後に俺に遺した言葉だ。…：桜子ちゃん、俺と結婚しよう。いいね？」

突然すぎて、何がなんだか分からない。

だけど、今日聞いた言葉の中でこの部分だけは、スッと頭に入ってきた。

『冬馬さんと私が結婚する』

断るはずがない。

だって私は…：ずっと冬馬さんのことを好きだったんだから。

「…：はい、よろしく願います」

彼のギリシャ彫刻のように整った顔を見つめながら、私はまるで魔法にでもかかったみたいにスリとそう答えていた。

私の母と八神の父が再婚したのは、私が六歳の春、もうすぐ小学校に上がるという時だった。

初めて八神家に行ったのが、その前の年のクリスマス。だだっ広いリビングルームに天井までの高さのクリスマスツリーが飾ってあったのを覚えている。

色とりどりの電球がチカチカと点滅し、てっぺんにはお星様が飾ってあって…：

いつか絵本で見たような光景だったから、自分が夢の国に迷い込んだのかと思った。

私は幼かったからあまり記憶にないけれど、私の実の父親はアルコール依存症で、たまに働きに行ってはクビになって、家でお酒を飲んで暴れる…：ということを繰り返していたらしい。母がパートと内職をして家計を支えていたものの、それはすぐに酒代に消えた。

母がどうしてそんな人と結婚したのかは知らない。

だけど、そのうち私にも手をあげるようになった父親に危機感を持った母は、『法アラス』という法的支援事務所の無料相談を利用して、父親との離婚を決めた。

その時にお世話になった弁護士さんが、後に母の再婚相手となった義父である八神だ。

義父には当時中学二年生の一人息子がいた。奥さんは息子さんが三歳の時に、病気で亡くなったという。

これから受験に差し掛かる、思春期の難しい時期。再婚なんて反対しそうなものなのに、クリスマスの日初めて会った義兄——大志は、私の手を引いてクリスマスツリーの前まで連れていき、プレゼントの箱を手渡しながらこう言った。

「これは俺とお父さんからのプレゼントだよ。あっちの箱はサンタさんから。今年は俺が飾り付けをしちゃったけど、来年は一緒にツリーを飾ろうね」

王子様みたいな甘い笑顔で言われたその時から、大志お義兄ちゃんは私の優しい兄になり、八神家が私の居場所になった。

そして、両親が入籍したのは翌年の春。

兄は、「俺は母親の記憶がないから、お母さんと可愛い妹ができて嬉しいよ」——そう言って

ニッコリ笑った。

そんな兄の友人である冬馬さんが初めて我が家に遊びに来たのは、私が小五で彼が大学一年の夏。彼は兄の同級生で、二人は共に弁護士を目指して大学の法学部で学んでいた。

冬馬さんは母子家庭で育ち、そのお母様が過労で亡くなられてからは、お祖母様と二人で生活されていたそう。高校を出たら働くつもりだった冬馬さんに、お祖母様は、『絶対に大学に行つて、何か資格を取りなさい。一人でも生きていける力を身につけなさい』と何度も繰り返し説いたと聞いている。その結果、彼は弁護士になろうと決めたという。

「母が過労で倒れた時に、仕事先の工場では何の補償もされなかったんだ。それが弁護士を目指すきっかけの一つになったのかもしれないな」

我が家で夕食を食べながら、冬馬さんがそう話していたのを覚えている。

冬馬さんは、お母様の生命保険やお祖母様の年金と貯金もあつて生活に困窮することはなかったものの、お祖母様に負担を掛けたくないと高校時代にアルバイトをして進学費用を貯め、奨学金も得て無事に大学に入学したそう。入学式では入学生総代として挨拶も務めている。

でもその年の春、冬馬さんが大学に入学してすぐにお祖母様が亡くなり、彼は広すぎる家を引き払つてアパートで一人暮らしをしていた。

「だから俺は、こういう家族団欒に憧れてるんですよ」

そう言つてご飯をお代わりする冬馬さんを両親も気に入る、本当の息子のように可愛がった。

我が家から大学に近いこともあつて、彼が家に夕飯を食べに来る時は泊まってくというのがお約束のパターンになる。

冬馬さんは私の初恋相手だ。

ハッキリ言つて一目惚れだった。

彼と最初に会つた日のことを、今でもよく覚えている。当時、小学五年生だった私がLDKのダイニングテーブルで席についていると、廊下から聞きなれた声がかかる。

——お兄ちゃんだ！

「お帰りなさい！」

大好きな兄の帰宅に喜んで振り向くと、兄の後ろに見知らぬ男の人が立っていた。

身長百七十八センチの兄よりも頭のとっぺんが飛び出している。百八十二、三センチはあるだろう。

その高身長の人のが「こんばんは、お邪魔します」と挨拶し、母がキッチンから「いらっしやい」と応じていた。

——お母さん、お客さんが来るって知つてたのなら、言つておいてくれれば良かったのに！

私はダボツとした白い長袖Tシャツにジーンズというラフな格好が恥ずかしくて仕方がなかった。だって、目の前に現れたのは、くつきりした二重瞼の猫みたいな目に、長い睫毛をバサバサさせている綺麗な男の人。しかも私と同じようなジーンズに白Tシャツなのに、雑誌を抜け出したモデルみたくにサマになつていて……



「初めまして、桜子ちゃんだよ。大志にいつも聞かされてるよ、『俺の妹は世界一可愛い』って」  
——なっ、なんてことを！

こんなカツコいい人に向かつて兄馬鹿ぶりを発揮していたとは……

お兄ちゃんフィルターが掛ければ、平凡な私でも『絶世の美少女』になってしまうから困る。

「……いつもは座敷童子って言うくせに」

ボソツと呟くと、兄がハハッと笑って、「なっ、冬馬。俺の妹は座敷童子みたいで可愛いだろ」と臆面もなく言い放った。

当時の私は今のようなロングヘアではなく、真っ直ぐな髪を肩で切り揃えていた。そこに白い肌と切れ長の目も相まって子供の妖怪に見えたらしい。

それを可愛いと言われても、ちょっと微妙だ。兄に話を聞いて『世界一可愛い子』を期待していたであろう冬馬さんに申し訳ない。項垂れていると、目の前にニユツと右手が差し出された。

——えっ？

「噂通り本当に可愛い子だった。よろしくね、桜子ちゃん」

チヨロいと言われても仕方がない。

だけど、あんな風に柔らかく微笑まれて、甘い声で名前を呼ばれて……小五のいたいけなハートが鷲掴みにされないわけがない。

大きくてちよつと冷んやりした右手をそつと握ると、ギュツと力強く握り返されて、私の心臓がドクンと鳴った。

それから私は、ずっと冬馬さんに片想いをしたままだ。

兄と冬馬さんは性格が正反対なのに、ひどくウマが合って常に行動を共にしていた。

兄は天真爛漫というか、明るくて人懐っこく、誰とでもすぐ打ち解けてしまう社交的な人だった。そして、思いついたら即行動の猪突猛進型。

対して冬馬さんは、どちらかと言えば口数が少なく、一步引いたところで周囲のことをじつくり見ながら的確なアドバイスをくれる、慎重な頭脳派。自分から積極的に話しかけていくタイプではないけれど、一旦打ち解ければ面倒見が良く、人の話を黙って聞いてくれるような人だ。

あの頃、我が家にはしょっちゅう兄のゼミ仲間が集まって、リビングのガラステーブルの周りを陣取っては、勉強会や飲み会をしていた。

いつも輪の中心になって盛り上げているのは兄の大志で、冬馬さんはその隣でニコニコして話を聞いている。

髪の色を少し明るめにしていた兄と漆黒の髪の冬馬さんは、見かけの対比も相まって、皆に『二人は太陽と月だな』なんて言われていた。

兄達の勉強会がある日は、私は自分の部屋には行かずダイニングルームに残る。

大好きな兄と冬馬さんに近寄りたけれど、知らない男の人や大人っぽいお姉さん達に気後れして、ちよつと離れたダイニングテーブルで頬杖をつき、その様子を眺めたものだ。

いつも兄がそれに気づいて、『桜子、こっちにおいで』と手招きしてくれて、『桜子ちゃん、俺の

隣に座ってな』と冬馬さんがニッコリ微笑みながら少し場所をズレてくれる。

私は兄と冬馬さんに挟まれて座り、よく分かりもしないのに、民法とか法令の議論や模擬裁判の練習を見ているのが好きだった。

そのくせ私は昔から、男の人の大声や怒鳴り声が苦手だったため、議論が白熱しすぎて、誰かが『それは違うだろっ!?』なんて声を張り上げると、首をビクッと竦めて固まってしまう。

そんな時は、何も言わずとも兄がすかさず肩を抱いてゆっくり摩擦してくれて、冬馬さんがポンポンと頭を撫でてくれた。私は二人に触れられたところからゆっくり温まって解れ、漸く身体力を抜くことができたのだ。

そうやって優しくされるのが嬉しくて、まるでお姫様にでもなれたような気がして胸がときめいて……ほんのちよつとの優越感を覚えていた。

そして二人から特別扱いされている私へは、綺麗なお姉さん達から羨望の眼差しが向けられる。

我が家に来るお姉さん達は、あからさまに敵対心に向けてくる人と、私を懐柔しようとする人の二パターンに分かれていた。

「あら、大志ってまさかシスコンなの？」

敵対心に向けてくるタイプのお姉さんが皮肉げに言うと、兄はニカッと白い歯を見せて、「そうなんだ、俺って妹に夢中だからさ、皆、俺の桜子に手を出さないでね」なんてあっけらかんと答える。

「えっ、俺ならいいだろう？」

「お前が一番駄目！ モテすぎるから絶対に桜子を泣かせる」

冬馬さんと二人で悪ノリして、あつという間にその場を和ませてしまうのだった。

そんな風に、大好きな兄の放つ明るい太陽の光と、初恋の人のくれる穏やかな月明かりに照らされて、その頃の私は何不自由なく幸福な少女時代を過ごしていた。

今思えばこの頃が、一番穏やかで楽しい時間だったのだと思う。

——太陽と月……

お日様のように輝く笑顔で皆を楽しくさせる兄と、蒼黒の空に浮かんで静かに優しく皆を見守っている月のような冬馬さん。

私は今でも昼に夜に空を見上げるたび、二人の顔を思い浮かべる。

両親が亡くなったのは、雪が散らついていた年の暮れ。私が二十歳、兄が二十八歳の時だ。

父が担当していた案件の資料を揃えるために一泊二日で遠出することになり、せっかくだからと観光も兼ねて母を連れて出掛けた帰り道。居眠り運転の三トントラックとの正面衝突で、二人共即死だったという。

葬儀の場は、私にとっては針のむしろだった。

「あんなバツイチの変な女に引つ掛かるから……」

「おおかた旅行に連れていけどでもせがまれたんだろう」

「あの子、どうするの？ 大志くんとは血の繋がりが無いし、この先邪魔になるんじゃない？」

こちらに聞こえるように交わされる会話に、私は黙って俯くのが精一杯で……隣に立っていた兄が、そんな私の手をギュッと強く握り、おもむろに口を開いた。

「他人が好き勝手言ってるじゃねえよ！」

喪主が発した突然の暴言に、その場が一瞬で静まり返り、そしてザワつく。

「大志くん、葬儀の場であんなこと言うの!？」

「俺達はお前の父親の弟妹だぞ！ 他人とは失礼な！」

顔を赤くして激昂している叔父達に向かって、兄はさらに言葉を続ける。

「父からは生前、あんた達の事業の失敗の尻拭いや借金肩代わりをさせられた苦勞話を散々聞かされていたんだ！ 俺は父親から、お前達とは絶対に関わるなって言われてるんだよ！ ハイエナみたいに金の匂いがある時だけ寄ってくるんじゃねえよ！」

叔父達はますます顔を真っ赤にして「なんだ、失礼な！」とか、「黙がなつてない！」とかブツブツ言い始める。

「桜子は俺の大事な妹で、唯一の家族だ！ 俺はこいつを手放す気はないし、これからも全力で守る。一応は父の弟妹だと思つて連絡したけれど、故人の家族を侮辱するような奴に見送つてほしくない。今すぐ出てつてくれ！」

親戚が尚もギャーギャー騒いでいたその時、椅子に座っていた冬馬さんがスツと出てきて彼らに名刺を差し出した。

「私は『あさひ法律事務所』の日野と申します。あなた達の行為は葬儀の妨害にあたり、刑法第

百八十八条で、一年以下の懲役若しくは禁錮又は十万円以下の罰金に処されます。今すぐ出ていかないようでしたら警察を呼びますよ」

そう言つてスマホの電話画面を目の前にかざすと、叔父達は慌てて帰った。

「冬馬さん……ありがとうございます」

私が深々と頭を下げると、冬馬さんは「辛かったね。君は真正正銘、八神ご夫妻が愛した大切な娘さんだ。堂々としていればいい」と、私の肩を優しく抱いてくれた。

「君は一人じゃない。大志がいるし、俺だって……俺にも頼つてほしい」

「はい」

肩に触れた手から、その言葉から、彼の優しさが全身に染み渡つて……だから私は、両親の死を悲しみながらも、寂しさに打ちひしがれることなく、前を向くことができたんだと思う。

当時私は大学二年生で、英文学科で英語学について学んでいた。

将来は父や兄のもとで秘書として働きたいと思つていたので、そのために英語ができたほうがいいと考えたからだ。

兄が働いていた法律事務所が大手企業の海外部門も扱つていたので、兄が一人前になって父の事務所を継いだ後には、国際的な案件も引き受けるようになると思込んでのことだった。

だけどそうなる前に兄は勤務先を退職、急遽父の遺した弁護士事務所を引き継ぐ。できるなら、働いていた大手の事務所でもっと経験を積みたかったに違いない。二十代の若さでいきなり事務所

を背負わされたプレッシャーは相当なものだったと思う。

弁護士という職業は、若いとなかなか信用してもらえない。

兄は私には何も言わなかったけれど、一時は事務所の経営も厳しかったのだろう。私達は家族で住んでいた家を売り払って、アパートで暮らし始めた。

「私、大学を辞めて働こうかな……」

そう言った私を、兄は鬼のような形相で叱りつけた。

「フザけんな！ お前が大学を辞めたら、俺は父さんにも母さんにも顔向けできないよ！ いいか？ 父さんと母さんは俺達のために多額の貯金と保険金を遺していつてくれたんだ。二人に恩返ししようと思うなら、そのお金で教養を身につけて、立派な社会人になれ。大学はそのための場だ！ お前は何も心配せずに、とにかく学べ！」

その言葉にポロポロ涙を零しながら頷いた私は、沢山学んで、いつか絶対に兄の役に立とうと決めた。

兄の言葉を受けてからは、兄の右腕となって働くことが私の夢であり目標となる。

一方、驚いたことに、他の事務所で働いていた冬馬さんが兄の事務所に移ってきてくれた。

そして私も学生生活の傍ら、時間があれば事務所に寄ってお手伝いをするようになる。

事務所に所属していた弁護士さんが父の死をきっかけに独立し、パラリーガルも彼について出ていったため、兄と冬馬さんの二人だけで事務所の全てをこなさなくてはならなかったのだ。

兄は「こっちは大丈夫だから桜子は学業を優先させろ」と言ってくれたけど、家で食事を摂る間

も惜しんで書斎に籠っているのを見ると、じつとしてはいらなかった。

『八神法律事務所』は都心の八階建ビルの四階に入っていて、私の通っていた大学とアパートのちょうど真ん中の位置にあったことも幸いした。

朝一番で事務所に行くと、窓を全開にして空気の入れ替えをする。窓とデスクを拭いてゴミ箱のゴミを集め、コピー機の電源を入れる。ここまでが私のルーティンワークで、後はその時によってクライアントへのお茶出しをしたり、電話番号をしたり。

たまに事務所で冬馬さんと二人きりになることがあって、そんな時はパソコンに向かって文章を打ち込んでいる彼の横顔を密かに眺めるのが楽しみだった。

クライアントが来た時にサツと立ち上がって、イタリアブランドの細身のスーツの襟元をパツと整えるお約束の仕草が好きで、いつも見惚れていた。

そんな感じでどうにか三人で仕事を回し、半年もすると事務所は軌道に乗ってくる。兄の持ち前の社交性と愛想の良さに加え、頭が切れて仕事もできる冬馬さんの尽力もあり、徐々に顧客を増やしていったのだ。

そこで新たに事務員を一人雇うことになってやってきたのが、当時三十一歳の水口麻耶さんだ。

彼女は元中小企業の社長秘書という肩書を持つ、紅い口紅の似合う美しい女性だった。社長の息子からのセクハラで会社を辞め、以降は派遣で事務職をしていたという。

彼女が来たことで私はあっけなくお役ご免となる。たまに顔を出して手伝おうとしても、兄に「そんなことより勉強しろ」と言われ、水口さんには「私がいるから大丈夫よ」と笑顔でティ-

ポットを取り上げられて、すっかり事務所での居場所を失ってしまった。

——冬馬さんのスーツ姿もあまり見られなくなるのか。水口さんが冬馬さんと並ぶと、美男美女でお似合いすぎて悔しいな……

「私ったら、何を言ってるんだろ」

今は兄と冬馬さんの努力が認められてきたことを喜ぶべきなんだ。水口さんが来てくれたことで、益々二人の仕事がはかどるに違いない。

私は余計なことを考えた自分を反省すると、両頬をベシッと叩いて気合を入れた。

けれど、そんなある日……

「気づいた？ アイツら付き合ってるっぽいな」

兄がおもむろにこう切り出した。

「えっ!？」

——付き合ってる？ アイツら……って……

そんなの分かりきっていたのに、それでも私は聞き返す。

「それって……冬馬さんと水口さん？ 本当に付き合ってるの？」

「多分な。俺にはハッキリ言わないけど、事務所にいる時もいい雰囲気だし、たまにアイコンタクトしてたり、給湯室に一緒に籠ってたりするんだ。それに元々冬馬は大人っぽい年上の女性が好みだから、タイプの彼女はドンピシャなんだよな」

——年上の大人っぽい女性……

それじゃまるつきり私と正反対。

「へえ、そ、そうなんだ」

「ああ、昔付き合ってた彼女も法学部の先輩だったし、アイツ、好みが分かりやすいんだよ」

いきなり目の前が真っ暗になったような気がした。

まさか自分が付き合えるなんて本気で考えていたわけじゃない。だけど、自分に向けてくれる笑顔や優しさに『ただの親友の妹』以上の感情のカケラが含まれているんじゃないかと、必死で目を凝らしてもいて……

「ふん……そっか」

——そうなのか……

長年に亘る私の初恋は、その瞬間にパチンと弾けて、消えていった。

兄が病気になったと知らされたのは、私がアメリカのボストンに留学中のことだった。

大学卒業後にすぐ働きたいと言った私に、語学留学を勧めたのは兄だ。

「これからは国際的な事案が増えてくるだろうから、英語ができればできるほどいい。俺の英語力では不十分だから、お前が本場のビジネス英語を身につけてくれたら嬉しい」

そう言われて決意した私は、大学を卒業するまでに秘書検定準一級、TOEFLスコア百点以上を取得して、ボストンのコミュニティーカレッジに入学を申請した。

——夢はもう目前！

もうすぐ兄のもとで働けると、あの頃の私は、期待に胸を膨らませていた。そんな私の留学期間中、一度だけ兄がボストンまで遊びに来てくれたことがある。

水陸両用の観光バスと一緒に市内巡りをしたり、有名なシーフードのお店でオイスターやロブスターを堪能したりと、夢みたいに楽しい時間を過ごした。

そしてそれが、元気な兄と一緒に過ごせた最後の時間になる。

『大志が胃の手術をしたんだ』

冬馬さんから電話でそう聞かされたのは、年が明けた一月初めの寒い冬。アメリカ東海岸が記録的な寒波に襲われて、ボストンは大雪が降っていた。

けれど、私の背筋がゾクリと冷えたのは、寒さのせいだけではなかったはずだ。

すぐに帰国すると言った私を冬馬さんが止めた。

『もう手術は無事に終わったし、大志も桜子ちゃんには知らせるつもりがなかったのを、俺が手術の報告だけはさせてくれてっお願いしたんだ。また改めて大志から連絡させる。お願いだから勉強は続けて』

その三日後に兄からも電話が掛かってきた。

『心配するなよ。ちよつと胃が荒れて手術したけど、もう大丈夫だしさ。冬馬にも知らせなくていいって言うておいたのに、アイツが心配性で……。桜子はあと二ヶ月の留学期間を全うしろ。帰ってきたらバリバリ働いてもらうから覚悟しとけよ!』

「分かった。秘書としてお兄ちゃんをバリバリ動かすから覚悟しておいて!」

そう言うて電話越しに笑い合ったのを覚えている。

だけどそれは、兄が私のためについた、優しい嘘だった。

期待に胸を躍らせて帰国した私を待っていたのは、半年前にボストンで会った時とは比べものにならないほど痩せ衰え、変わり果てた兄。

そして病室で兄本人から告げられたのは、進行性のスキルス胃癌でもう手の施しようがないということ。電話で知らされた手術というのは癌を取り除く『根治手術』ではなく、食事が食べられるようにバイパスを作るだけの『緩和手術』と呼ばれるもの……という残酷な事実だった。

兄がボストンに来たのは、病名を告知された直後のことだったのだ。

ショックで泣き崩れた私に、兄は『桜子の笑顔が見たい』と言った。

『残された時間を桜子とゆっくり過ごしたい』と。そのまま緩和ケア専門のホスピス病棟に転院した兄に私はずっと付き添い、残された時間を一緒に過ごす。

ホスピスでの兄は痛み止めの点滴でうつらうつらしていることが多かった。けれど意識のハッキリしている時には仕事の資料を開き、事務所での業務内容や手順を事細かくレクチャーしてくれた。そして眠たくなると、『桜子、手を握っていて』と言って血管と骨の浮き出た手を差し出す。

私が言われた通り両手でその手を包み込むと、安心したようにゆっくり瞼を閉じるのだ。

たまに私がベッドサイドにうつ伏せで寝てしまった時は、ふと気づくと私の髪を兄の手が優しく撫でている。

「くっそ……死にたくねえな……」

頭の上からそんな吹きが聞こえ、私は寝たフリをしながらも涙を止められず、肩を震わせ嗚咽を漏らした。

兄はそんな私に気づいて一旦手を止めるものの、黙ってまた私の髪を撫で続けるのだ。

そんな風に兄の命を刻々と削りながら、哀しくも穏やかな時間は過ぎていった。私は二十四歳の誕生日を兄と共に病室で迎える。

私の誕生日は五月五日の端午の節句だ。

小さい頃は、男の子のお祝いの日に生まれたというのが凄く嫌だった。だけど兄が、『桜子、五月五日は子供の健やかな成長を祝う日なんだぞ。そんな日に生まれたんだから、桜子はきつと健康で長生きする!』と言ってくれてからは、自分の誕生日が嫌いではなくなった。

——私の健康なんてどうでもいいから、兄に元気でいてほしい! お願いだから、長生きしてずつと一緒について!

あの二十四歳の誕生日ほど、そう強く願った日はない。

その日の夕方、冬馬さんが誕生日ケーキを持って病室に現れた。兄が呼んだのだという。

白い生クリームの上に、『桜子ちゃん、おたんじょうびおめでとう!』と書かれたチョコプレートに、うさぎとクマのマジパン。

小さな子供が食べるような可愛らしいイチゴのケーキを三人で食べた。

その頃には殆ど何も食べられなくて点滴の栄養だけで命を繋いでいた兄も、生クリームを一口舐

めて「甘っ!」と顔をしかめながらも、どうにか薄っぺらい一切れを口に作る。

嬉しくて哀しくて、涙が止まらなかった。

ひとしきり泣いた後で、兄が私と冬馬さんの顔を交互に見ながら口をひらく。

「桜子……後のことは、全部冬馬に任せてある。相続のこと、事務所のこと、葬儀の手配……それと、お前のことも……だ。これからは何かあったら冬馬を頼れ。分かったな?」

「お兄ちゃん、そんなことを言わないで……!」

またも泣き出す私の手をギュッと握り締めて、兄は冬馬さんを見上げる。

「冬馬、何度も言うようにだけ……後のこと、桜子のことを……よろしく頼む!」

「ああ、任せておけ。心配するな」

二人は目と目で合図を送り、頷き合った。

兄と冬馬さんの間では、もう何度も話し合いがされてきたのだろう。

最後に兄はもう一度私の目をじつと見つめると、穏やかに微笑む。

「桜子、俺はお前を心から愛してる。幸せになつてくれ。ずつと見守ってるからな」

「お兄ちゃん……私もお兄ちゃんが大好きだよ! 愛してるよ! だからどこにも行かないで! ずつとそばにいてよ!」

泣きながらすがりつくくと、兄の痩せ細った腕が、それでも力強く私の背中を抱き締める。

消毒液のおいに紛れて末期患者独特の死臭が漂ってきた気がしてギョツとした。

私はそれを兄から掻き消したくて、必死に涙で洗い流した。

その翌日に、兄は眠るように亡くなった。  
今思えば、兄があの日冬馬さんと呼んだのは、自分の最期を予期していたからなのだろう。  
相当な痛みがあつたはずなのに、最期まで弱音を吐かず、笑顔を見せてくれた。  
強くて優しい、最愛の兄だった。

## 2 一人の寝室

葬儀の後には忙しくなると覚悟していたのだけど、思っていたよりも私にできることは少なかつた。  
生前に兄が全ての手配を済ませてくれていた上、冬馬さんが面倒な雑務を一手に引き受けてくれたお陰だ。相続や入籍に関する手続きも、全部冬馬さんが済ませてくれた。

兄の死で抜け殻のようになっていた私は、彼から次々と差し出される書類に黙って署名し印鑑を押すだけで良かったのだ。

その流れ作業に没頭している間は何も考えなくて済み、それに救われていたのかもしれない。それらの作業が終わって、アパートで荷物の整理を始めた途端に辛くなる。

兄は私の手間を考えたのか、自分の書斎は綺麗さっぱり片付けてあつた。  
兄の覚悟と愛情を見せつけられたようで、私の胸は余計に苦しくなる。

兄と二人で住んでいたアパートは、そこかしこに思い出が散らばりすぎている。  
両親が亡くなった時も辛かつたけれど、あの時は隣に兄がいた。

——今は私だけ……

どうとう一人ぼっちになってしまった。

あんなに優しくいい人ばかりの家族で、どうして最後に残つたのが私なのか。



兄はよく私のことを『幸福を呼ぶ座敷童子だ』なんて言っていたのに、幸福を呼ぶどころか不幸続き。

「これじゃ思いっきり疫病神……」

家族四人が笑顔で収まっている写真立てを抱き締め、床に座り込む。涙が頬を伝った。

そう言えば、兄が亡くなったあの日以来、ずっと泣いていなかった気がする。葬儀の時は親戚の声に耐えるのに精一杯だったから……

「お父さん、お母さん……お兄ちゃん……一人は辛いよ……」

写真立てを持つ手にギュッと力を込めて目を閉じる。生きるための希望がプツリと切れた音がした。

——もうどうでもいい。

父と兄の手伝いがしたくて英語も秘書検定も頑張ったのに……今はもう二人共いない。

留学なんかするんじゃないかった。お兄ちゃんから離れるんじゃないかった……

「桜子ちゃん……」

不意に名前を呼ばれ、心臓が跳ねる。振り向くと、部屋の入り口にスーツ姿の冬馬さんが立っていた。

何も言えずに頬を震わせていた私は、部屋にズンズンと入ってきた冬馬さんに抱きすくめられる。

「こんなところで……一人で泣くな」

「冬馬さん……」

「俺がいる……俺が支えるから、自分が一人だなんて思うな！ これからは俺の胸で泣いてくれ！」

「冬馬さん、私……」

「うん」

「冬馬さん……」

「うん」

優しく髪を撫でられて、感情が決壊した。

「わーーーーっ！」

私は冬馬さんの胸に顔を埋めると、子供のように泣きじゃくり、必死でしがみつく。

彼はスーツが汚れるのも構わず、背中をキツく抱き締め髪を撫で続けてくれた。

「……落ち着いた？」

何分経ったか分からない。だけど、胸に溜まっていた感情を爆発させて、いくぶん気持ちが和らいだ。

黙ってコクリと頷くと、「どれ、見せて？」と両頬を手で挟まれ、顔を覗かれる。

「いやっ！ 泣いてたからみっともない」

慌ててバツと手から逃れた直後、ハハッと笑い声が降ってきた。

「見かけを気にする余裕があるなら大丈夫だ。ほら、立てるか？」

手を引かれ、二人でヨイショと立ち上がる。

ずっと座り込んでいたせいで足がフラついて、私はまたもや冬馬さんの胸に倒れ込む。

「あつ！」

「おっと、だいじょう……」

慌てて支えてくれた冬馬さんと至近距離で目が合い、ドキツとする。

私の潤んだ視界の中で彼の猫のような瞳が一つ瞬きして、そして細められた。釣られて私も目を閉じる。次の瞬間には柔らかい唇が重なってきて……

——あつ。

それはほんの一瞬で、気づくと、熱と共に顔が離れていた。

冬馬さんはフイツと目を逸らし、私の手首を掴む。

「さあ、俺達の家へ帰ろう」

「俺達？」

「そう。もう絶対に桜子ちゃんを一人にはしない。君と俺、二人の生活を始めるんだ」

そして私はコクンと頷き、手を引かれるままに思い出の場所を後にした。

私のファーストキスの相手は、初恋の人で……同情で私と結婚した人だった。

冬馬さんに連れてこられたのは、驚くことに、私と兄が住んでいたアパートから車でほんの五分の近距離にある、新築の白いマンションだった。

地下の駐車場に車を停めながら、彼は「君に相談もせずに悪かったけど、結婚を機にマンションを購入したんだ。前に住んでたところは二人で住むには狭かったから……。気に入ってくれたら嬉

しいな」と言って、はにかむように微笑んだ。

エレベーターが停まったのは十二階建マンションの十階で、手を引かれて入った先は眺めの良い3LDKの角部屋。

「弁護士という仕事柄、書斎用の部屋があるのとセキュリティがしっかりしているのが条件だったんだ。あと、見学に来た時に、『キッチンが最新式のドイツ製だから奥様が喜びますよ』……とか、『大理石のアイランドカウンターがあるからいいですよ』とか言われて……」

首の後ろに手をやり頬を紅く染めている冬馬さんに、私もなんだか気恥ずかしくなり俯いた。

『奥様』という言葉が、胸をソワソワさせる。

——冬馬さんは、兄の遺言で結婚した私を、それでも大事にしようと呼びかけてくれているんだ……

私も冬馬さんに満足してもらえるよう、本当に愛してもらえるように、精一杯尽くそう。

「そして、君の部屋はこっち」

冬馬さんは次々と室内のドアを開けて私を案内した後、最後にウォークインクローゼット付きの八畳の洋間に入った。

大きな掃き出し窓の外にはベランダがあり、その先にはパノラマの景色が広がっている。

「わあ、素敵！」

「うん、ここを桜子ちゃんの部屋として使って。女性は男よりも荷物が多いだろうし、洋服の収納場所だって必要だろう？」

「だけど……」

広い収納スペースといい、ベランダに面していることといい、この部屋は何というか……

「冬馬さん、この部屋は夫婦の寝室ですよね？」

「……うん、本来の使い方としてはそうだろうね」

「この部屋を私が一人で使うんですか？」

「うん、どうして？」

「いえ、夫婦の寝室なら……その……クローゼットは二人で一緒に使いませんか？」

すると冬馬さんは困ったように頬をポリポリと掻きながら、スツと目を逸らす。

「いや……基本的に、この部屋に俺は入らない」

「えっ？」

「ベッドはセミダブルを入れておいたけど、もつと大きいほうが良ければ好きなものを注文してもらって構わない。俺は向こうにあるもう一つの部屋を使うから、君はこの部屋を好きに使って」

「えっ、でも……」

「今日は疲れただろう？ 夕食の準備は俺がするから、荷物の整理をしていいよ」

そのまま目も合わせずに、部屋を出ていった。

——冬馬さん？

彼の考えていることが分からなくて、荷物を出すのもそこそこにキッチンに向かう。冬馬さんはパスタを茹でていた。

「お手伝いしてもいいですか？」

私の声にビクツとして振り向いた彼は、「いや……ソファァで休んでて」と素っ気なく言い、また鍋に向かう。

「私これでも、結構お料理はできるんですよ」

「うん、知ってるよ。お母さん譲りの優しい味だ。大志も褒めていた」

「そうですか、兄が……」

そこで沈黙が降りて、気まずい空気が二人を覆う。

キッチンカウンタ―に置かれているトマトを見つめ、「これはサラダ用ですよね？ 切ればいいですか？」と私が手を伸ばすと、「いいからっ！」と撥ね除けられた。

コロンと床に転がったトマトを同時に見つめ、冬馬さんが片手で額を押さえる。

「くそっ……！」

しゃがんでトマトを手を取って、「ごめん、本当に大丈夫だから……向こうで座っていてほしい、そう呻くような声で言われ、私は黙って従うしかない。

同居初日の夕食は、全く味が分からなかった。

——ああ、やっぱり……

冬馬さんは既に私を持って余しているのだろう。成り行きとはいえ、今まで妹のように接してきた相手といきなり結婚することになったんだ。

——もしかしたら、水口さんにまだ気持ちがあるのかな……

水口さんは、葬儀の時に受付をしてくれていた。……ずっと私の隣に立っていた冬馬さんを、彼女はどんな思いで見ているのか。そして今は、どんな気持ちで冬馬さんと一緒に働いているんだろう……

——お兄ちゃん……どうしてお兄ちゃんは、あんな遺言を残したの？ 冬馬さんはきつと……後悔しているよ。

そして宣言通り冬馬さんは、私の眠る寝室に入ってくることはなかった。

\* \* \*

冬馬さんとの新生活は、坦々と、そしてどこちなく始まった。

これを『新生活』と呼ぶのか、『同居生活』と呼ぶべきなのかは微妙なところだけ……

それでも入籍して夫婦になった以上、やはり『新生活』と呼ばせてほしい。たとえ殆ど顔を合  
わせることがなくても、夫婦の寝室がずっと別々であつても……だ。

「——おはようございます」

「うん、おはよう。朝食を作ってくれたんだ、悪いね」

「いえ、あの……奥さんなので、一応」

「あつ、ああ……そうだね。ありがとう」

一緒に住み始めて六日目。

今日は結婚してから初めての週末で、私と冬馬さんは久しぶりに一緒に食卓を囲んでいる。

ここに来た初日の夜に冬馬さんが作ってくれたパスタを食べて以来、彼は家で食事をとつていない。

兄がいなくなった後、事務所が抱えている案件を一人でこなしている彼は、昼も夜もなく働いている。朝はコーヒーを一杯飲むだけで早い時間に家を出るし、帰りは深夜すぎが当たり前。

帰宅してからも書斎から明かりが漏れていることが多いから、睡眠時間もろくに取れていない。違う。

私も事務所に行つて、せめて雑務や電話番号だけでもしようと思つたのに、冬馬さんにやんわりと断られていた。

『桜子ちゃんは引越したばかりなんだし、まだ向こうのアパートの片付けも途中だろ？ 今週一杯は荷解きしながらのんびり過ごしていい。こういうのは落ち着いた頃にどつと疲れが出るものなんだよ』

だとしたら、これから疲れが出るのは冬馬さんのほうなんじゃないだろうか。

だって彼は私の留学中から病気の兄をずっと支えてくれてたんだから……

自分の無力さが齒痒くて、全く頼られないことが寂しくて……せめて週末の食事くらいは作りた  
いと思つた。

「あの、冬馬さんの好みがよく分からなかったので、今日は簡単にトーストと目玉焼きとサラダだけにしたんですけど、冬馬さんって朝は洋食派ですか？ それとも和食派なんですか？」

それさえ知らずに夫婦になったことが、今さらながら情けない。

「俺はどっちでも。祖母と住んでた時は味噌汁に納豆だったけど、一人になってからはコーヒーにトーストか、コーヒーだけだったり……」

——ああ、そうか……冬馬さんもお母様やお祖母様を亡くされてたんだった。そして今度は仕事のパートナーであり親友であった兄までも……

だからなのかもしれない。

大切な人を失う悲しみや喪失感を知っているからこそ、彼はこうやって一人になった私に寄り添ってくれるんだ。彼は本当に優しすぎる。

「土曜日なのに、今日もまたお仕事ですか？」

彼が着ている糊ぬりのきいた白いカッターシャツを見て尋ねる。

「ああ。でも今日は午前中にオフィスで一件相談を受けるだけだから、午後はフリーだ」

「そうですか。でしたら午後はのんびりできますね」

すると冬馬さんはハツとした顔をして、申し訳なさそうに眉根を寄せた。

「そうだよな……君はここに籠こもってばかりで退屈だもんな。気が利かなくて申し訳なかった。今日の午後は出掛けよう」

「いえ、そういうんじゃないんです！ 冬馬さんがずっと働はたらき詰づめだから……その……妻として、身体が心配で……」

そこまで私が言うと、冬馬さんはテーブルに両肘をついて顔を覆おほう。

「妻……って……」

——あっ！

図々しすぎたかもしれない。

冬馬さんにお世話になってばかりの身で差し出がましいことを言った。そのうえ余計な気まで遣わせて……

冬馬さんは暫しばらくジツと考え込んでいたけれど、何か思いついたようにパツと顔を上げた。

「このままじゃ駄目だよな……うん、今日は一緒に外出しよう。何処どこがいいかな。映画はどう？」

「そうじゃなくって！ 私は冬馬さんに休んでほしいんです！」

けれど、被かぶせ気味に答えた私に一瞬たじろいだ彼は、ニカツと白い歯を見せる。

「桜子ちゃんはいい奥さんだな。氣遣かたってくれるのはありがたいけど、新妻と過ごす時間だつて俺にとつては貴重な息抜きなんだ、付き合つてよ」

——にっ……新妻！

「俺達の初デートだな」

——デート!?

甘い笑顔で言われ、私はもう額うなすく以外に選択肢はなかった。

\* \* \*

「——ただいま……おつ、オシャレしてるね。素敵だよ、とても似合ってる」

その日の午後。仕事から帰ってきた冬馬さんは、私が着ている膝下丈のワンピースを上から下まで遠目に見て、三日月みたいに目を細めた。

アメリカから帰国して以降、オシャレをする気持ちも余裕も全くなかったから、こういう華やかな色合いの服装は久しぶりだ。

クリーム色のシフォン生地に紫のライラックを散らしたロングワンピースは、地味すぎず派手すぎず、兄も似合うと褒めてくれたお気に入りの一着。肩に羽織った濃紺のカーディガンが、ガリーっぽさを抑えて、少しは大人っぽく見せてくれている……はず。

それを見て、サラッと『素敵だよ』なんて台詞を吐けてしまうあたり、やはり冬馬さんは女性慣れしていると思う。

「今すぐシャワーを浴びて準備してくるから待ってて」

「あつ、いいんです！」

「えっ？」

呼び止めた私を振り返り怪訝そうな顔をする冬馬さんに、今日ずっと考えていたことを伝える。

「今日はやっぱり、このお部屋で過ごしませんか？ 冬馬さんはああ言ってくれたけれど、私はあなたに無理をさせたくありません」

「だから、俺は君と息抜きを……」

「息抜きだったらここでもできますよね？ 今日はおうちデートです」

「えっ？」

私はガラステーブルの上にある袋を手にとって、中からDVDを取り出す。

「家で映画鑑賞しようと思ってレンタルしてきました。どれがいいですか？ アクション、コメディ、ホラーにロマンス。四種類の中から好きなものを選びただけですよ。途中で居眠りするのも御自由に」

パッケージを見せていたずらっ子みたいに突っつみせると、冬馬さんは呆気にとられた顔をした。それから足早に近付いてくる。

「きゃっ！」

ガシッと抱き締められて、DVDがバラバラとクリーム色のカーペットに落ちた。

「全く……君っていう子は……」

頭の上から髪の毛越しに唇が落とされる。

私の耳元で「待ってて、すぐ戻るから」と囁くと、冬馬さんはバスルームへ消えていく。

「うっ……わっ」

——耳元で、あの色気のある低音ボイスは反則！

今キスされたばかりの頭に手を当てて、私はぼーっと立ち尽くしていた。

そして——

ヴァーーーーーッ！ キャーーーーーッ！ ガッ！ ブシュッ！

「……あの……もうスプラッターなシーンは終了しましたか？」

「うん、多分ね」

「多分って、そんなにいい加減な！」

「それじゃ、きつともう大丈夫」

「それじゃ……って！　なんだか怪しいからもう少しこのままです！」

私はソファでクッションに顔を埋めながら、くぐもった声で宣言する。すると、隣でハハハッと笑われた。

「桜子ちゃんさ、なんでゾンビもののDVDなんて借りてきちゃったの？　昔から苦手だったじゃない」

「えっ、知ってたんですかっ!?」

ガバッとクッションから顔を上げると、白い歯を見せて愉快そうにしている冬馬さんの顔がある。

「だってさ、俺が八神家に入り浸った時に、リビングで大志とホラー映画を見てたらギャーギャー叫んで逃げ出してただろ」

「おっ、覚えてたのに、わざとコレを選んだんですかっ!?」

「うん。選択肢にあったから」

「イジワルっ！」

「だって、女の子とのデートならホラー系がデフォでしょ」

「えっ、そうなんですか？」

「そうだよ。怖いシーンになればしがみついてもらえて自然にボディタッチができるし、吊り橋効

果でドキドキさせられる」

その彼の言葉で脳裏に水口さんの顔が思い浮かび、胸がモヤツとした。

——冬馬さん、せっかくのおうちデートで、過去の女性とのデートを匂わせるような言動はNGですよ。切ないです……

「さっ、さすが冬馬さん、恋愛上級者ですね。女の子を落とすテクニクを熟知してる感じ」

「そんなことないよ」

「だって……」

私は膝に置いたクッションに視線を落とす。冬馬さんは前を向いたまま片手を伸ばしてきて、クッションの上の私の手を包み込んだ。

「桜子ちゃんが乙女の妄想を働かせてるのを邪魔して悪いけど……今話したのは一般論で、実際に実践したのは今日が初めてだ。一緒にホラー映画を見るのも、ベタな口説きテクを使ってみようと思っ相手も桜子ちゃんだけだよ」

「えっ!?」

私がバツと冬馬さんに顔を向けると、同じくこちらを向いた彼と視線が重なる。

「第一、女の子と二人きりでデートなんて高校の時以来だし……正直ちよつと緊張してる」

「嘘っ！」

「嘘じゃないよ」

それが本当だと伝えるかのように、上から握る手にギュッと力が加わった。

——大学の大人っぽい先輩は？ 水口さんは？ 付き合ってもデートしてないってこと？  
冬馬さんの顔を見つめたまま考え込む私に、冬馬さんがテレビのほうへ顎をしゃくる。

「あっ、桜子ちゃん、見てみなよ」

「えっ？」

バタンツッ！ ヴガー————ツッ！

「イヤ〜っ！」

「ハハハッ」

思わず冬馬さんに抱きつくと、「ほらね、こうして自然にボディタッチ……」と言った彼の言葉が途切れ、急に沈黙が訪れた。

ドクン、ドクン、ドクン……

勢いで抱きついたものの引き際が分からなくて、大木にとまるセミの如く、冬馬さんの胸にしがみついて固まる。

——今、冬馬さんはどんな顔をしているの？ 冬馬さん、私は吊り橋なんか渡らなくても、ホラー映画を見なくても、あなたといると常にドキドキしてますよ。

その時、グイッと両肩を掴んで胸から離され、次の瞬間には柔らかい唇を押し付けられる。

——あっ！

頬にサラリと触れる彼の黒髪から漂うのは、この六日間で覚えた、冬馬さんのシャンプーの香り。外出の時にはオーストラリアブランドの香水を付けている彼の、このシトラスハーブの香りを嗅

げるのは、一緒に家にいる私だけだ。

長めの口づけのせいなのか、ハーブの香りに酔ったのか……気持ち良くて頭がぼろろとする。

唇から全身に伝わる快感に身を委ねていると、ゆっくり顔を離されると。私はトロンと目を開けた。

「……ごめん」

「えっ？」

冬馬さんは気まずそうに顔を背ける。

「やっぱりホラーはやめておこうか。コメディにする？」

そう言って別のDVDに入れ替え始めた。

——どうして謝るの？ キスしたことは……間違いだっていう意味ですか？

ファンファーレと共に軽快な音楽が流れ始め、次の映画が始まる。

だけど、とても楽しめそうにない。

——駄目だ、なんだか泣きそう……

「私……夕食の準備をしますね」

「あっ、桜子ちゃん！」

冬馬さんは私の名前を呼んだものの、立ち上がりはしなかった。

私は顔を伏せたまま急いでキッチンに向かい、シンクに両手をつく。

——こんなのって……

始まりが同情からであつても、二人の時間を重ねていくうちに夫婦らしくなれると思っていた。



アパートでキスされて、少しは好意を持ってってくれているんじゃない？…なんて期待して、だけど寝室は別々でガツカリして…

——どうして、今またキスしたの？

どうしてそんなに辛そうな顔をするの？

さっきのは…：…ただの吊り橋効果による勢いですか？

私は大きく深呼吸して、涙が出るのをかろうじて堪えた。

その夜のディナーは、とても味気ないものだった。

プチトマトとクルトンを添えたシーザーサラダも、オードブルのサーモンマリネもエッグフアルシも、午前中からコトコトと煮込んであった牛タンシチューも全部、腕によりをかけて作ったはずなのに、舌が麻痺したみたいに味が分からない。

冬馬さんが気を遣って料理を褒めてくれて、私が笑顔で返す。だけどその会話はぎこちなく、酷く上滑りしていた。

「あっ、後片付けは俺が」

私がお皿を持って立ち上がると、冬馬さんがそれを奪ってシンクへ運ぶ。

「でも、今日は冬馬さんに休んでもらうために…」

「十分休ませてもらったよ。料理も美味しかった。ありがとう。俺は洗い物を食洗機に放り込んだら少し書斎で調べ物をして寝るから、君もお風呂に入って休むといい」

「…：…はい、ありがとうございます」

袖まくりして食器を予洗いし始めた彼の後ろ姿を暫く眺めて、私は自分の部屋に着替えを取りに向かった。バスルームでシャワーを浴びつつ、自分がこれからどうすればいいのか、どうすべきかを考えてみる。

冬馬さんは優しいし義理堅い人だ。きっと自分からは、この結婚の解消を言い出せないだろう。

——だとしたら、私から言う以外、冬馬さんを自由にしてあげることができない…

私はそれに耐えられるのだろうか。

兄の遺言で強制的とは言え、幼い頃からずっと好きだった相手と結婚することができた。

一緒に住んで、すぐ近くで声を聞き、見つめ合い…：…キスもした。

好きなのは自分だけで、そこに冬馬さんの気持ちはないのだと分かっているけど、嬉しくなってしまうっている。

…：…と同時に、虚しさも感じていて…

「せめて最後に…」

駄目元で、気持ちをぶつけてみようか？

それで拒否されたなら、いっそ諦めがつくというものだ。

——これは最後の賭けだ。

冬馬さんに受け入れられなかったその時は、潔くこの結婚生活も冬馬さんも諦めて、彼を自由にしてあげよう。

冬馬さんにはもう十分に救ってもらったのだから……  
一度そう決心してしまうと何だか気持ちスツキリして、勇気が湧いてくる。  
私はいつもより念入りに隅々まで身体を洗うと、湯船に入ってお湯にバシヤンと顔をつけた。

冬馬さんの寝室で彼を待つ。時計の針は午後十一時半。

ドアをゆっくり開けて部屋に入ってきた冬馬さんが、彼のベッドの上に正座している私を見つけ、足を止めた。

そのギョツとした表情から、彼の困惑がありありと伝わってくる。

それはそうだろう。

女性から夜這いだなんて、はしたない女だと思ったに違いない。

だって、これは彼にとって、親友の遺言に従っただけの愛のない結婚。

独りぼっちになった親友の妹への同情……

だけど私は……

「冬馬さん……どうか私を、本当のあなたの妻にしてください」

——どうか私を……抱いてください。

### 3 初めての夜

白いバスローブ一枚だけを身につけ、ベッドの上で正座して三つ指をつきゆっくりと頭を下げると、部屋の中に沈黙が訪れた。

恥ずかしくて顔を上げられない。

息をするのも憚られるほど静かな空間に、パタンという音が響く。

たぶん冬馬さんが部屋のドアを閉めたんだろう。

続いて床を進む足音、そしてキツと椅子が軋む音。

「桜子ちゃん……顔を上げて」

静かに言われてゆっくり顔を上げると、目に飛び込んできたのは黒いガウンの背中だ。

冬馬さんは自分のデスクに向かって座り、パソコンの画面を開いていた。

——えっ？ そんな……こつちを向いてもくれないなんて……

拒絶するように向けられた背中に、自分はまだ嫌がられたのかといたたまれなくなり、今すぐここから逃げ出したくなった。

だけど、振り絞った勇気はもう残量ゼロだ。ここで諦めたらその次はない。

どうせ駄目になるのなら、何も言わずに逃げるよりも当たって碎けるほうがいい。

そう考えていると、冬馬さんが話しかけてきた。  
その顔はパソコンの画面を見つめたままだ。

「桜子ちゃん、こんな時間に男の部屋の……それもベッドの上にいるって、どういう意味かわかっていますの?」

「……はい、分かってここに来ました」

低い声音が微かに怒りを孕んでいて、答える私の声は思わず小さくなる。

——軽蔑……された?

カッと顔が熱くなる。

自分の声が力なく震えているのが分かった。

「自分の部屋に帰ったほうがいい。今ならまだなかつたことのできるから」

「嫌です!」

思わず正座を崩して前に身を乗り出す。

「桜子ちゃん、だから……っ!」

バツと振り返った冬馬さんが、私を見てすぐに顔を逸らした。

えっ? と思つて自分を見ると、ベッドに両手をついて前屈みになっていた私のバスローブがはだけて、胸元や太腿が露わになっている……

——わっっ! 何やってるの、私!

慌ててバツと前を合わせ、着崩れを直す。

「あの……お見苦しいものをお見せしまして……失礼しました」

けれど、冬馬さんは私の言葉に目をキョトンとさせた後、「ハハッ、お見苦しいもの……っ……つ……つ……ハハハッ!」と、背中をククッと震わせ椅子の背もたれに後頭部を乗せて大笑いする。

——わっ、笑われた! 胸を見られて笑われたっ!

一世一代の勝負をするはずが、自分の大失態のせいで空気が変わってしまった。

——最低……大失敗だ。

ガツクリ肩を落としてしていると、冬馬さんが椅子をクルッと回して立ち上がり、こちらに歩いてくる。ギシッとベッドに腰掛け、私の頭を優しく撫でた。

「桜子ちゃん、無理しなかつたっていいんだ。俺は君と結婚できただけで十分だし、そういう行為をしなかつたって、君を嫌いになつたりしない」

「違います!」

叫ぶように言うのと、冬馬さんがビクツとして手を止めた。

「私はただ、冬馬さんともっと近付きたくて……。冬馬さんが兄に義理立てして結婚してくれたというの分かっています。これ以上を望むのは贅沢だっということも……。でも、きつかけは遺言で仕方なくでも、結婚した以上は心を通わせて、本当の夫婦になれたら……」

「義理立てって……俺はっ!」

「どうしても私じゃ駄目ですか? ほんの少しでも、私に愛情を持つことはできませんか? 今が駄目なら、今後その可能性は……あつ!」